未来を生き抜く子どもたち③

生活も学びも、おんなじです

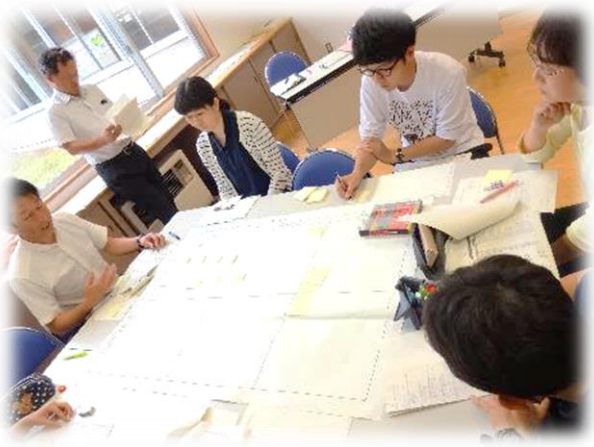
2018．06．12
No.17
校長　渡邉　幸二

子どもたちが奇声を上げて遊んでいます。遊び時間ですから文句は言われまいと思っているのでしょうが、ここは学校という公共の場です。ましてや子どもたちが生活する場です。“不審者が侵入したか!?”と思われてしまってもいいような声を上げることは公共の場ではふさわしくありません。それに、“なんだ、事件性はないのか‥‥浜田の子どもは時々こうだからな”と「狼と羊飼い」のようになってはうまくないです。気づいていない子どもたちもいるので、どうか教え諭してください。きつく注意しても伝わらず、逆効果になる場合もあります。**なぜなのかを考えさせながら、真剣に諭して**ください。そして、**当たり前のようにできている子どもたちに注目してください(褒める、認める)**。ガミガミ怒りをぶつけても、何度叱ったつもりでも子どもたちはそのような子どもに変容しません。

こういう常識(公共の場のたしなみ)があるというのは、人が人として生きていく上でたいへん重要です。しかし、いつも教えられてばかりでは、子どもの成長はありません。

校内放送について　～　自らの力で生活する子どもに

管理職になってから勤めた学校では、チャイムを使用しませんでした(教諭時代もそういう学校が多かった)。**時計を見て、自分で生活をつくる、自己管理できる子どもたちにするため**です。昨日の研修会でもあったように、子どもたちが失敗しないようにすることが良き先生(環境)と勘違いしてはいけません。つまり、授業や活動に遅れないような工夫を先生がしても、子どもたちは動かされているだけで、自らそういう思考･行動をするようにはなりません。最低でも１回は、子どもたちが困る場面がないといけないんです。



浜田小学校にチャイムが鳴らないのもそういう理由だったはずです。ところが、休み時間の終わり頃やそうじの終わり頃に、「あと３分で‥‥」のような児童による事前連絡(余計なお世話)の放送があります。

私たちは**「自ら考え、自らの力で生きる子ども」**を育てようとしているのです。おそらく、以前、あまりにも時間を守れない子どもがたくさんいて、困った先生がそういう工夫(おせ

っかい)をやるようにしたのでしょう。先生が困るからいけないのです。**困るべきは遅れた子ども自身**にしてあげないと、いつまでたっても子どもは成長･自立できません。**遅れた責任を子ども自身が感じ、子ども自身が次からは遅れない工夫しなければ**、一丁前の人として生活していくことが難しい、あるいは人としての成長が遅れてしまうでしょう。昨日の研修会でも、そういう教えがあったはずです。学びでも生活でも同じです。私たちが育てようとしているのは、自らの力で生きる子どもです。

職員室からの放送＝緊急放送

同じように、職員室から先生方が放送することも一考を要します。たとえば、何かの集会の場所を児童に念押しの放送することを考えてみましょう。

「〇〇子ども会は△△教室です。‥‥子ども会は～」と、集会の直前に、再度場所を放送する場合があります。**この放送は「自ら考え、自らの力で生きる子ども」として成長･自立する上で必要でしょうか。**

もちろんＮＯです。こういう放送をしていると、あとで誰かがもう一度言ってくれること＝放送に頼り、担任の事前指導を聞かない子ども、困った時に自ら行動できない子どもを育てます。担任の先生の話を聞かない子どもが悪いのです。聞かなかった子どもが困るべき問題です。**先生が行うべき工夫**と言ったら、話だけでわからない子どもに対する**視覚支援というＵＤ**(ユニバーサル･デザイン)された支援です(そういう支援ができるのは担任力のある先生です)。それに、困った時にどういう行動をすればよいか‥‥たとえば近くの同級生･上級生に聞くとか、教室に張り出された通知を見るとか、何かしらのアクションを起こせる子どもにしなければなりません。道に迷った時に“**泣いてばかりいる子猫ちゃん**”では困るのです。

もし誰かを呼び出したいのであれば、**内線電話**を使いましょう。それにこの程度の規模の学校であれば、呼び出しも自分の足で十分可能です。

今後は

職員室からの放送は緊急を要する場合

という原則にしたいと思います。

もう一度心に刻みましょう。

私たちが育てていかなければならないのは、未来を切り拓いていくような、自ら考え、自ら行動を起こせる‥‥そんな力をもった子どもたちです。それは、生活場面でも、学習場面でもおんなじです。